



1. 圧迫感を与えない建物ボリュームの考え方

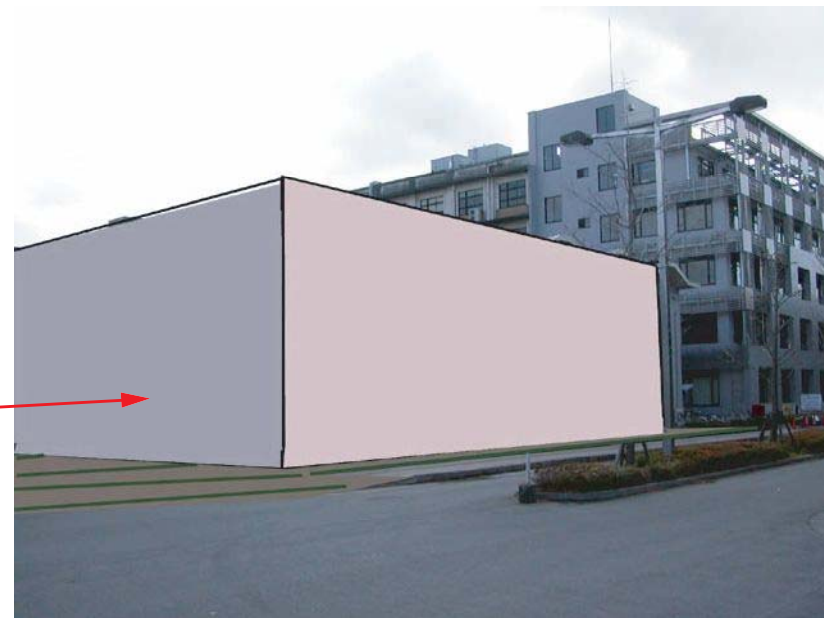
キャンパス内は、高密度な利用・機能的な利用が必要とされる場所と、歩行者や屋外でくつろぐ人々の快適性が優先される場所と、2通りを考えることができる。主たる歩行者動線や広場は、建物によって圧迫感や暗さがもたらされないように、配慮してゆく必要がある。



工作センター付近を大通りから見たところ：重要な歩行者動線にあたるこの場所では、将来計画での建て替えに伴う圧迫感が懸念される。



主要な歩行者街路として
図書館前に準じて18m程度
確保し、壁面線を決定する。



日影検討によって求めた景観上許容される建て替え可能ボリューム：
街路を18mの歩行者専用道路と考えたときに、約半分が冬至でも4時間日照を確保できることを求めると、このブロックでは分節された2層程度の建物が上限であると考えることが出来る。

＜日影検討から求めた結論＞（次項参照）

- (1) 重要な歩行者街路にあたるブロックでは、建物が圧迫感や暗さを与えない程度のボリュームとしなければならない。
具体的には $D/H=0.7$ 以上とすること、および街路の半分で冬至に4時間日照（測定面=GL+4m）を確保することを提案する。
- (2) 上記に則して壁面線を決定し、将来にわたってこれを守ることが必要である。
- (3) 街区ごとに統一感、リズム感を生むように計画することが必要である。



図書館前：主要な歩行者街路に大きく影を落とし、かつ圧迫感も大きい。
この場所の D/H は、道路敷までで0.7弱である。
最低限、舗装をソフト感のあるものに変えてゆくなど可能な限り歩行者の快適性を高める工夫が必要。



高密度な利用が必要である場合もあるが、主たる歩行者動線はこのように高密度であってはならない。



高密度に建て迫った街路。路上駐車も大変多く、陰鬱な感じが強い。

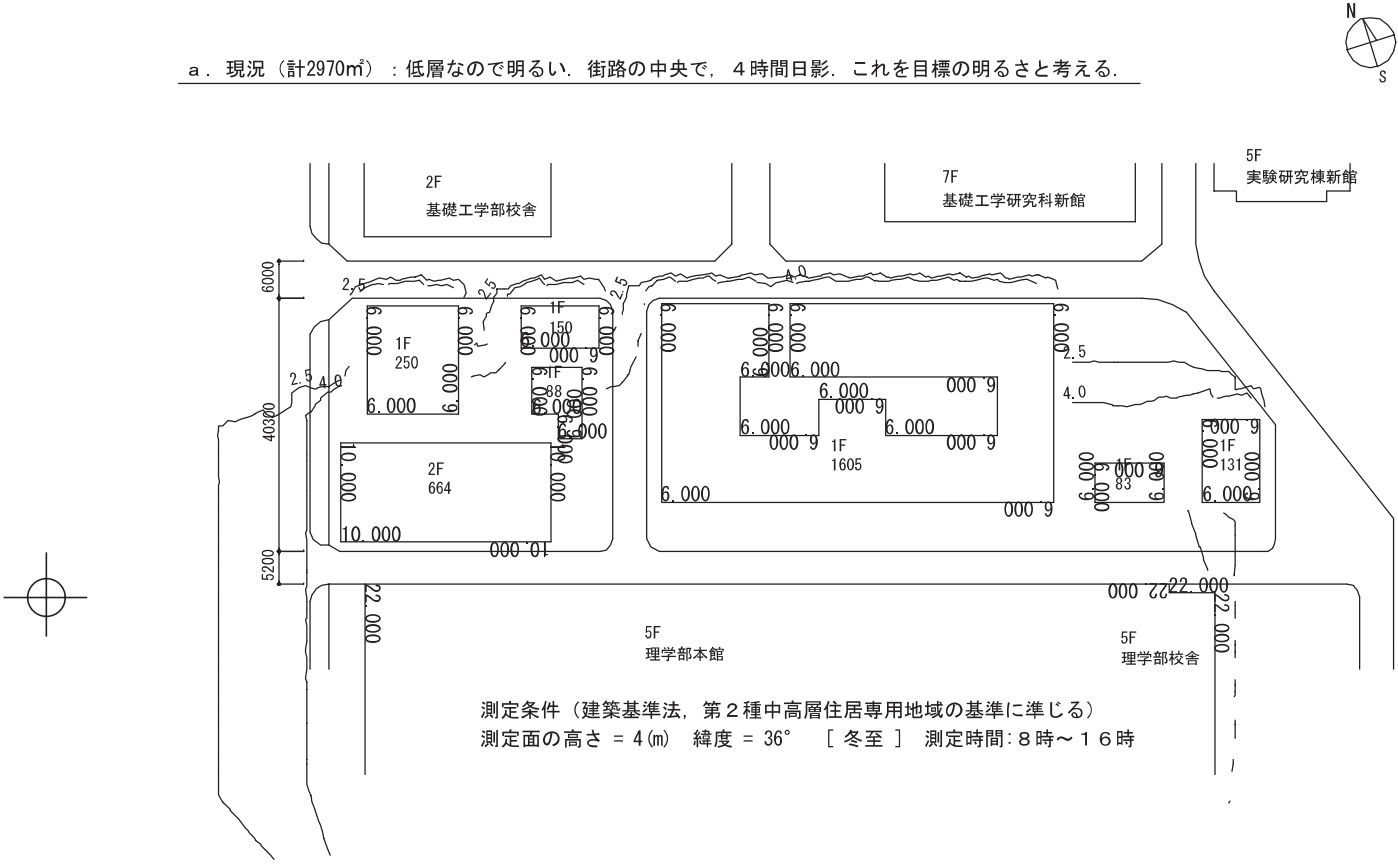


街路の南側に7層の建物があるので、日影が大。今後この街路に面して計画される建物は、複合日影を考慮して、十分な棟間間隔をとって計画し、街路がこれ以上暗くならないよう配慮する必要がある。



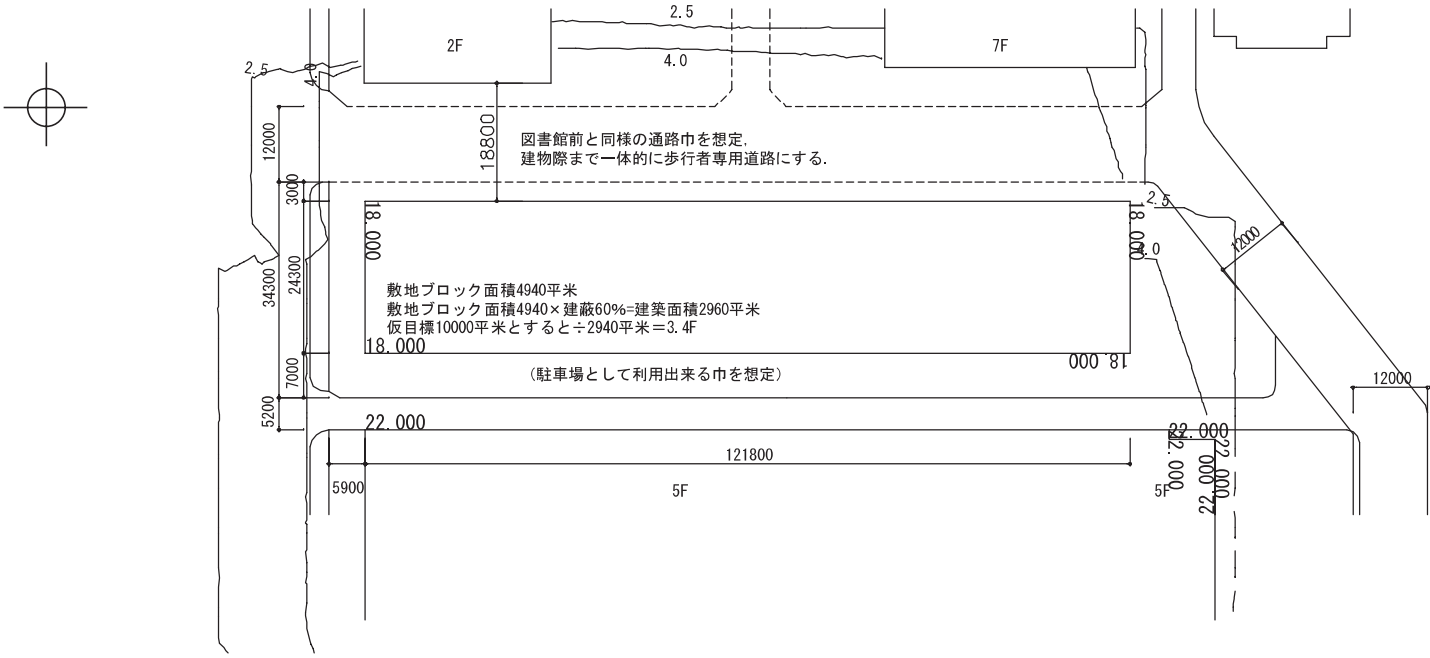
工作センター周辺における日影によるボリューム検討 (1/1200)

a. 現況 (計2970㎡) : 低層なので明るい。街路の中央で、4時間日影。これを目標の明るさとする。

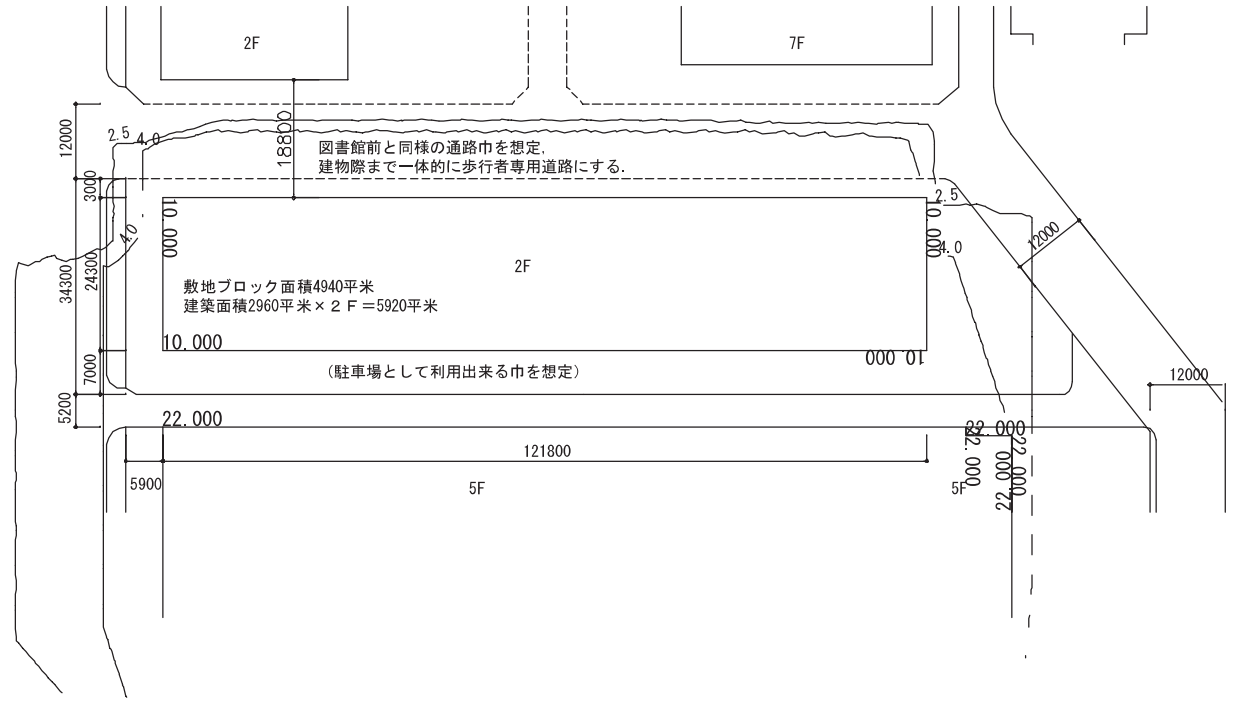


測定条件 (建築基準法, 第2種中高層住居専用地域の基準に準じる)
測定面の高さ = 4 (m) 緯度 = 36° [冬至] 測定時間: 8時~16時

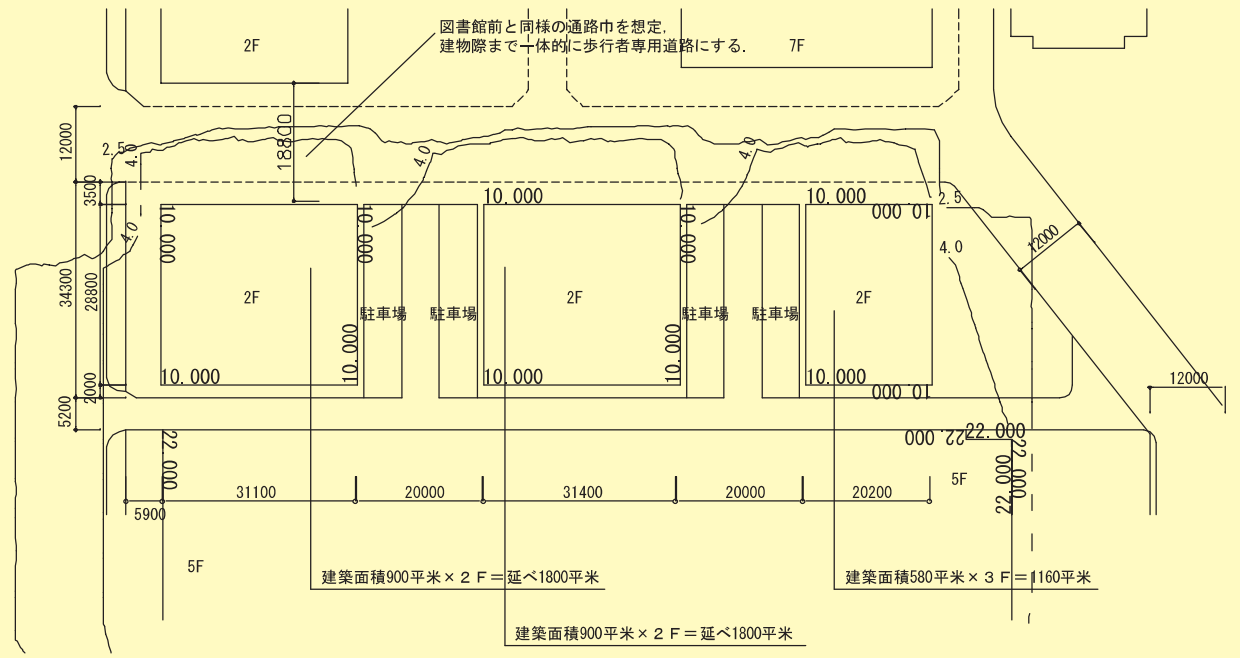
b. 10000平米を中層 (4F) で建てた場合: 仮に4層で建築すると、街路全体が4時間日影を大きくオーバー。



c. 低層 (2階建て) を一体で建てた場合 (5920平米) : 低層であっても、現況より暗くなる。



d. 低層 (2階建て) を3分棟で建てた場合 (合計: 4760平米) : 低層を分棟化することで、現状と同等の明るさを得られる
それでも現況工作センター周辺の1.6倍の床面積を確保できる



<結論>

- (1) 重要な歩行者街路にあたるブロックでは、建物が圧迫感や暗さを与えない程度のボリュームとしなければならない。
具体的には $D/H=0.7$ 以上とすること、および街路の半分まで冬至に4時間日照 (測定面=GL+4m) を確保することを提案する。
- (2) 上記に則して壁面線を決定し、将来にわたってこれを守ることが必要である。
- (3) 街区ごとに統一感、リズム感を生むように計画することが必要である。



2. 街路に応じた歩車道の考え方



共通教育棟群前：
レンガや石などの美しいペイメント（舗装）は、歩行者専用空間であることを強くアピールする。

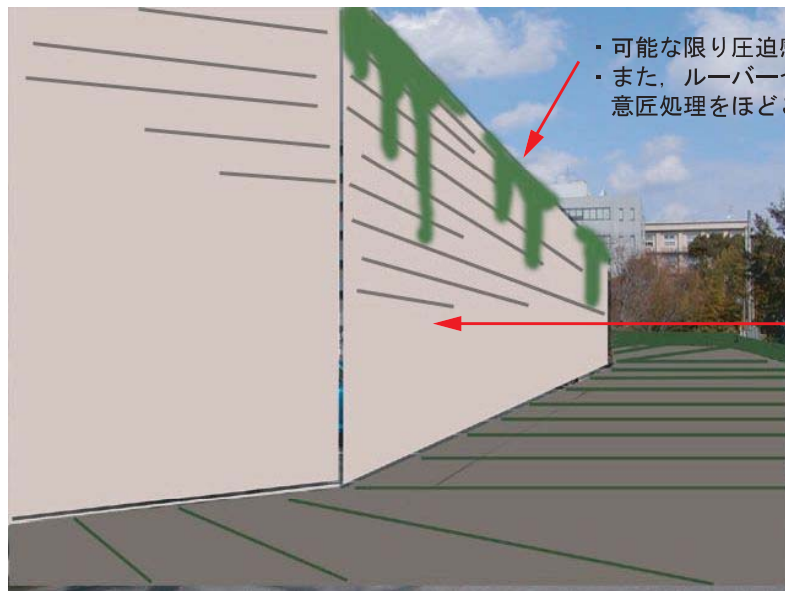


学生会館前：
人の賑わいがある場所だが、重要な車動線にもあたるため、歩車分離を徹底する必要がある。

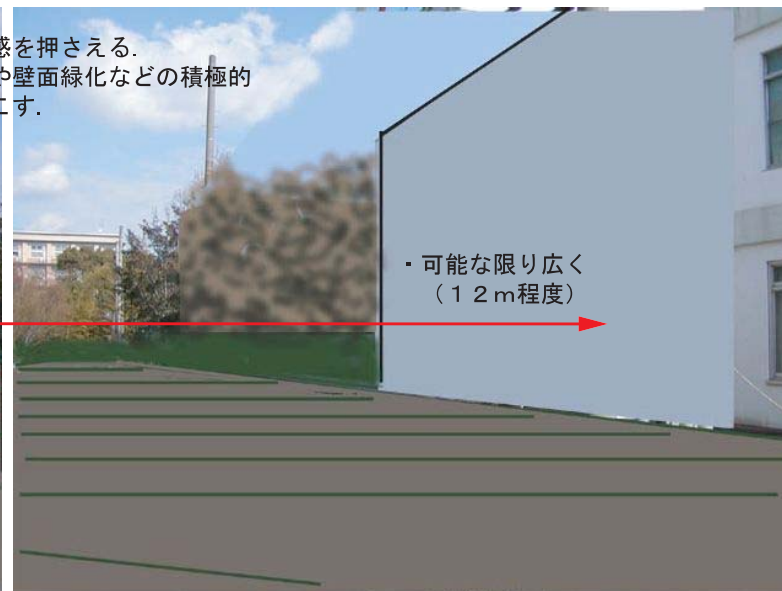


・歩行者街路としてのボトルネック部分なので、放射線シールドの撤去をはかる。

理学部裏立体駐車場計画地：



・可能な限り圧迫感を押さえる。
・また、ルーバーや壁面緑化などの積極的意匠処理をほどこす。



・可能な限り広く（12m程度）

主たる歩行者動線になるので、建物（立駐）の圧迫感を可能な限り軽減し、緑化やルーバーなどの積極的意匠処理を行う必要がある。また、道路は歩行者専用をアピールする舗装や植栽をもうけながら、可能な限り拡幅して、十分な幅員を確保する必要がある。



写真の、下草が刈られた状態では美しい。主たる歩行者動線としては狭いので、拡幅整備が必要。



手摺りを撤去して、構台状の部分を広げる。また正面の立体駐車場計画では景觀に配慮、合わせて歩行者専用通路の拡幅をはかる（放射線シールドの撤去も含めて検討する）

必ずしも樹木伐採は必要でないが、可能な限り広がり、見通しの良い通路を計画する必要がある。



豊中キャンパスには、アイストップとなる景觀要素が少ない。今後そのような場所に建設される建物は十分にこれを考慮する必要がある。



裏道的な場所であっても、アイストップは景觀上十分に有効である。



工作センターと基礎工の間の街路からは、待兼池周辺がアイストップとして目に入る。



3. 駐輪場の分散配置について



共通教育大通り脇、言語文化研究棟裏：
植栽が密にほどこされているが有効でなく、閉鎖的空間である。



現状の植栽をある程度残しながら、中低木を中心に整理撤去して見通しを確保しつつ、建物と街路の間の空間を駐輪場にしてゆくことが可能である。



同じ場所を共通教育大通りから見たところ。



共通教育化学棟前も、植栽と掲示板の背面は同様。



共通教育化学棟前。



キャンパス内のどこでも、駐輪はあふれている。

4. 植栽の街路との関係性について



大通り旧サイバー前：
植栽が過剰に重層的で、街路と建物敷が分断されている感がある。



現状の植栽をある程度残しながら、中低木を中心に整理撤去して見通しを確保し、芝やタマリユなどの地被類や草本植物を多く取り入れる。また、道路と建物敷の段差が大きくない場所では、石積みや小擁壁類を極力廃止して、街路との親和性、一体性を高める。



歩道の高木、低木、建物足下の中低木と、3層以上の重層的な植栽で、閉塞的な感じがする。



同様のことは、オープンスペースにも言える。
現状の植栽は街路に対して閉鎖的で、重く暗い。



すっきりした建物際の例。

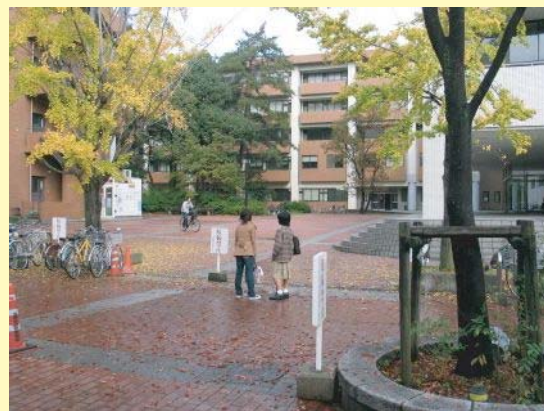


現状の大通り・共通教育前では、通りの中央に並木が入っており、ビスタの焦点を阻害している。
中央の並木を撤去し、街路両サイドの並木を主体とすることで、見通しが大変良くなる。





5. 中庭 (将来の新規・改修) の計画指針の考え方



この共通教育棟群中庭は、人の通行も多く、樹木の密度も適度で、舗装も街路と一体性を持っており、比較的良く整備され、利用されている。



共通教育棟中庭：共通教育棟群の中心にありながら、通過動線に面していないため、使われないもったいない空間である。場合によっては自転車置き場等としての利用も考えられる。



理学部中庭。外界と断絶しており変電設備等のみが設置された荒地になっている。設備置き場のな中庭が生じることは、致し方がない面もあるが、砂利敷きなど最低限の舗装は必要と思われる。



文法経校舎中庭：比較的きれいに整備されているが、モニュメント、東屋、プレハブ、渡り廊下がちぐはぐである。休憩スペースとして設置される中庭は、プレハブ等を撤去して、極力広がり感のあるものにしなければならない。



宇宙・地球科学科棟中庭
非常に閉鎖的な空間。
右の化学・高分子棟入口と2層分程度のピロティでつないでおけば、見通しとともに、人の往来が生まれるので、改修の機会があれば検討の価値はある。

表裏の関係にある。

6. 建物入口と街路の関係性の考え方



通り抜けによって、人を呼び込む設え。



共通教育棟ピロティ：街路からの引き込みを工夫している例。天井高さが低く薄暗いのが惜しい。



入口が街路から引き込み過ぎて、内向きな空間を構成している例。
底の形状や舗装の工夫などによって、街路に対して正面性をアピールする設えが必要である。



大通りに背を向けた位置に入口があり、孤立感のあるオープンスペースになっている。改修の機会があれば、中庭とのピロティによる連絡を検討する価値があると思われる。



街路から遮断されるように計画され、街路との親和性・一体性を欠いている。
植栽の一部撤去と、歩行者仕様の舗装を車道へ伸ばす工夫だけでも人を呼び込むことができる。

